

## 特集ワイド

# 映画「家族を想うとき」脚本、ポール・ラバティさんに 聞く 孤立進み、疲弊する労働者

毎日新聞 2019年12月11日 東京夕刊



英・仏・ベルギー合作映画「家族を想うとき」の一場面 = photo: Joss Barratt,  
Sixteen Films 2019

私たちは日々、何のために働き、どこに向かっているのか。社会問題をテーマにした作品を撮り続ける英国のケン・ローチ監督の新作「家族を想うとき」（13日から東京・ヒューマントラストシネマ有楽町ほかで全国順次公開）は、見る側にそんな問いを投げかけてくる。脚本を担当したポール・ラバティさんへの電話インタビューを通じ、現代社会における労働と家族について考えた。【井田純】

作品は、宅配ドライバーとして働き始めたリッキーと介護士の妻アビー、16歳の息子、12歳の娘の4人家族の日々を描く。

さまざまな肉体労働の職を転々としてきたリッキーは、マイホームを手に入れるためにと、配送運転手の職に就く。社員として雇用されるのではなく、「個人事業主」として契約する形で、配送用の車もローンで購入。まともな保障もなく、大量の荷物に追われて1日14時間、週6日勤務という過酷な労働が続く中で、家族の歯車が少しずつ狂っていく――。

舞台は英北東部の都市ニューカッスルだが、今の日本の出来事といわれてもまったく違和感のないリアルな物語は、登場人物と同じような立場の人たちへの入念な取材に基づいている。1990年代からローチ作品の脚本を手がけてきたラバティさんは、前作「わたしは、ダニエル・ブレイク」（2016年）と比べても「はるかに取材が難しかった」と振り返る。

「こうしたテーマを取材する場合、労働組合などを通じて協力してくれる人を紹介してもらうのが通例です。しかし、（映画と同様に）宅配運転手たちは、それぞれがあまりにも孤立していて、こうした方法では接触できなかった」。仕事が始まる前や終わった後などの時間帯を狙って駐車場に足を運び、運転手に取材の趣旨を直接話して協力を要請したのだという。ちなみにラバティさんは、英国の弁護士資格を持ち、ニカラグアの人権団体で活動していたこともある。

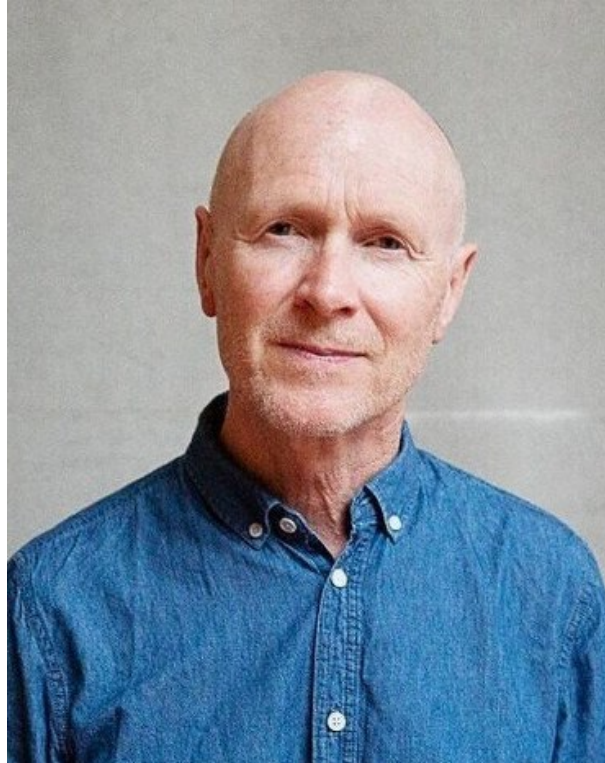
さらにこう続ける。「配達現場の実態を詳しく知るため、取材相手を説得して配送車に同乗させてもらった。運転手の立場は弱く、取材に協力したことが会社に分かってしまうと、彼ら自身がトラブルにあう可能性もあり、注意が必要でした」

映画でカギとなる役割を果たすのが、運転手一人一人に配備される電子端末だ。劇中では「スキャナー」と呼ばれ、データを読み取って配送荷物を管理すると同時に、会社が個々の運転手の勤務状況を管理する端末として使われている。

「すべての行動が記録され、テクノロジーで管理されていることで、さらにプレッシャーと疲労が募る。代わりの運転手を自分で探さなければ休めず、そうしなければ制裁金が科される。だから事故も多い。実態的には完全にコントロールされているのに、『自営』という名目ですべてが個々の運転手の責任にされ、会社側はリスクを回避している」。リッキーは仕事の初日、スキャナーのほか、トイレに行く時間もないから、と仲間にしびん用のボトルを手渡される。人間の労働を軽減するはずのテクノロジーの発達が、まったく逆に作用している現実が浮き彫りにされる。

妻アビーの仕事、高齢者や障害者の訪問介護の現場も厳しい。「利用者宅を次々に訪問、朝から深夜まで拘束されているのに、ケアとケアの合間の時間には報酬が支払われない。交通費も自己負担。頭に浮かんできたのが、『では、子供たちはどうしているのか』という問いでした。十分な保障のない過酷な労働のしわ寄せは結局、家族にいく。そんな考えから、物語が生まれた」

原題の「Sorry We Missed You」は、「（配達に来たものの）残念ながらご不在でした」の意味で、作中、リッキーたちが使う不在連絡票に印刷されている文言だ。同時に、「会えなくてごめん」という、家族の間のすれ違いを連想させるニュアンスが込められている。



ポール・ラバティさん

映画は、弱い立場の人々が、自らの苦境を社会ではなく自分のせいにしがちな心情を暗示的に描いている。例えば冒頭の面接シーン。リッキーは建設現場や配管工、造園などの仕事を転々としてきたことを話し、「プライドがあるから」生活保護は申請していない、と胸を張る。物語の中盤では、家族がトラブルに見舞われ、日々の仕事の疲労も蓄積していくリッキーが、長男から「自己責任だろう」という言葉を投げつけられる。日本にもありそうな話ではないか。ラバティさんは言った。

「200年前の英国の詩人、ウィリアム・ブレイクは、こうした心理を『心が作った足かせ』という表現で表しています。

頭の中で、自分を奴隷のように拘束し、動物のように働かせてしまう。2年間暮らした米国でも『勝ち組になれないのは自分の責任』という考えがはびこっていた。意識下での搾取であり、これほど巨大なウソはない」

映画では、仕事で日々消耗していく父の姿に長男が心を痛めつつも、社会の中で父が置かれている境遇と自分の将来への閉塞（へいそく）感を重ね、衝突を繰り返す様子も描かれる。「貧困の連鎖」という言葉が浮かぶ。

## 社会はつながっていることを考えて

ラバティさんは指摘する。「労働組合の解体は80年代の保守党・サッチャー政権で進められ、労働者が孤立していった」

労組を「目の敵にした」と評されるサッチャー政権は、公共サービス民営化、規制緩和の傾向を強めた。その後の90年代末からの労働党・ブレア政権でも「ニューレーバー」の看板の下で同様の方針が引き継がれた。

公営住宅や生活保護などの社会保障のための支出が「悪者扱い」される一方で、政治家や大物実業家の権益は国家に守られる。こうした英国社会の実態を告発したのが若き論客、オーウェン・ジョーンズの著書「エスタブリッシュメント」（海と月社）だ。昨年暮れに出版された邦訳には、日本の現状ともオーバーラップする言葉が並ぶ。

＜政治家は経費をごまかし、企業は租税を回避し、（中略）こうした行為はすべて法律で容易にされ、奨励すらされる。その一方、社会序列の最下層の人々が犯すほんの小さな罪、たとえば生活保護の不正受給は厳しく取り締まられる＞

同書は、民営化による公共サービス削減で庶民が苦しむ一方で、国家が大企業の利益を守っている実態を実例を挙げて告発する。また、組合活動が職場の問題解決や仕事関連の疾病減少に寄与することで、結果としては社会全体の支出削減につながっていた、という政府機関の調査結果を明らかにしている。

自分もいつの間にか「心が作った足かせ」にとらわれ、仕方がない、自分が悪いと思い込んでいないだろうか。ラバティさんは言う。「この映画が示した現実には氷山の一角にすぎない。メディアには、その下にある大きな問題を広く伝える役割があります」。総選挙を12日に控えた英国で、この映画は各地の労組や教会などの会場で上映会の輪が広がっているという。

「映画を見た人それぞれが、自分に荷物を届けてくれた人や家族の介護をしてくれる人、リッキーやアビーのような立場の人のことを思い出してほしい。そし

て彼らの家族のことを想像し、社会はつながっているということを考えてほしい」

---

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。画像データは（株）フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.